関東教区では、毎年夏に金光教東京平和集会を開催しています。今年も７月15日、第37回の集会を開催しました。

広島や長崎で開催される本教の平和集会が、原爆が投下された地で、被害者の慰霊と鎮魂を祈るということが大きな柱となっているのに対し、東京平和集会では、平和問題をさまざまな角度から取り上げています。

この座談会では、東京平和集会の企画・立案に携わっておられる３人に、今日までの集会を振り返りながら、回を重ねる中で見えてきたものや今後の課題について、話し合って頂きました。

東京平和集会　真の平和を求めて

▲右／第30回集会（2012〈平成24〉年）。左端が東京布教センター初代所長・川上功績先生　左／今年７月、女性と人権をテーマに開催された第37回集会

▶1983（昭和58）年に開催された第1回集会

東京布教センター設立
教団の戦争責任問う

――東京平和集会はどのような願いから始まったのですか

辻井　７年前（２０１２年）、東京平和集会が第30回という節目を迎えた際に、これまでの集会の在り方を総括する機会がありました。その時、東京布教センターの初代所長であった川上功績先生が次のように述べておられました。

第２次世界大戦後、教団は再出発の理念として、二度と武器を持たない、二度と戦争に協力しないということと、一人一人の生活を通したご神願成就を求めていく、という三つがあったとのことです。

そして、１９８１（昭和56）年の東京布教センター設立時に、一人一人の生活がご神願成就につながっていく上で、世界真の平和が大切だということになり、その平和を実現していくために教団は何をすべきか、また、一人一人が取り組める平和実践を求めていくといった問題意識が生まれ、それが集会開催の出発点となったとのことでした。

宮田　その時の川上先生のお話なんですが、尊敬するある先輩教師から、「私には今も悔やむ罪がある。先の戦争で、何の罪もない多くの女子や子どもたちを死なせ、たくさんの先生方を戦地に赴かしめ、相済まないことをしたと心が痛む。戦後の私の生き方は、実にこの戦争の罪の意識にある。二度と戦争に協力しない教団を作るために、私は教師になった」と、言われたそうです。

川上先生はその言葉を、その先生だけの問題にするのではなく、教団として引き受けていくことが必要だと感じ、「東京布教センターという教団の機関が設置されることを機会に、平和について考える集会を開催し、教団の罪の償いを教団の機関として問うていかなければならない」と、平和集会が開催に至った経緯をおっしゃっていました。

時事的関心をテーマに
教祖様の視点を提示

――出発点は、先の大戦の苦い経験をどのように受け止め、乗り越えていくかということが、大きなテーマだったわけですね。ところで、現在は人権、差別、環境問題といったように、テーマが多岐にわたっています。問題、関心が当初とは変わってきたということでしょうか

宮田　当初は戦争ということを中心にテーマ化してきたんですが、平和の反対概念は戦争ではなく「平和ならざる状態」だと指摘されるようになり、社会構造そのものに存在する暴力を問題にしていこう、ということになりました。そこで、人権、差別、環境問題ということも、その時々の企画メンバーの中で協議されていったんだと思うんです。

山田　今年のテーマは女性と人権でしたが、昨年、話題になった#MeToo（ミートゥー）運動や医科大学の入試に関わる女性差別問題もあり、タイムリーなテーマだと思い、興味を持って参加しました。

辻井　その時々で参加者の関心がどこにあるか。それと企画委員がやってみたいことがどう合致するかが大事ですよね。

２００３年のことなんですが、３月にイラク戦争が起きました。その年は、環境をテーマに企画を進めており、そのテーマで開催したんですが、ある方から、「この一大緊急事態にそんなことをやっていていいのか」という意見を頂きました。そうした声も盛り込んだ結果、その後は非戦をテーマに企画されることが増えました。

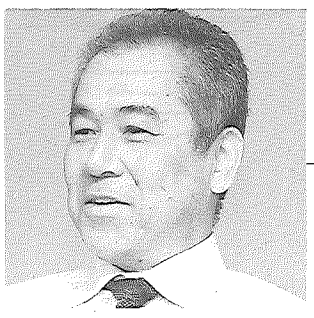
また、政治色が強く、直接取り上げることは敬遠されてきた憲法９条についても、この時期から、思い切ってやってみようということになりました。アメリカ同時多発テロ事件からイラク戦争という一連の流れの中で、国会で憲法９条についての議論が活発化し、国民的関心が高まっていたことが背景にあります。そのようにテーマは多岐にわたるんですけれども、参加者と企画委員の関心に応えられるような内容を取り上げるようになってきていると思います。

宮田　憲法問題や集団的自衛権などをテーマに取り上げるようになってから、賛成、反対など、さまざまな意見が交わされるようになりました。企画する側も、当然意見が分かれるだろうという想定の下で、あえてそのようなテーマを取り上げてきました。

辻井　２０１６年、憲法９条を取り上げた時は、改憲、護憲、選憲という、三つの立場に分かれてプレゼンテーションをするという形式で開催しました。企画する側が意識したのは、一つの結論に誘導するようなプログラムにはしないということでした。集会後のアンケートでも、いろいろな意見が出ていて、好評でしたね。

宮田　教務で行う平和集会ですので、こちら側の意見を一方的に押し付けることはできません。そうとして何をするべきかというと、さまざまな情報を参加者に提供して、それぞれに判断してもらう、というのが基本的なスタンスです。もちろん、こちらの側には、願いとする方向性はあるんですけれども、表には出さないということでやってきましたね。

辻井　そのような企画内容ですから、いろいろな意見があ



東京布教センター設立時の志を受け継いで
「平和ならざる状態」問題に

金光教東京センター次長　宮田 和弘先生

2010（平成22）年～2014（平成26）年まで、社会活動部門の次長として平和集会に関わり、現在も担当次長として平和集会に中心的に関わる。東京都本所教会。

って当然なんですが、一つ隠しテーマがあるんです。それは、教祖様の信心という視点から見たらどう考えられるかということです。そこで最後にまとめて、教祖様の信心から見たらこうですよと信仰者としての視点を提示する。企画を立てる上で、そこが一番重要なんです。

平和の捉え方が複雑に

世界真の平和って？

――憲法9条をテーマにした集会での参加者の反応にも表れていたそうですが、かつての冷戦構造の中での平和の考え方と違って、現在は、平和の捉え方が複雑化してきています

宮田　平和ぼけという言葉もありましたが、冷戦時代は、ある程度安定した視点で平和を考えてきたところがありました。しかし、現在の国内外の情勢は、いつどのような形で世の中の仕組みが変わるか分からない状況にあります。やはり日頃から平和を意識して考えていかなければ、ということを思いますし、1年に1度開催される集会が、日頃から考える上での指針になればと願っているところです。

とはいえ、信仰が土台にあっての平和集会ですから、金光教として、あるいは金光教の教義との関わりで平和の中身を求めていくということを常に考えさせられています。

山田　集会を企画する上で大事にしているのは、政治的側面から語られる平和ではなく、命の問題としての平和です。その時々の政治状況とは距離を取った上で、今としての大事なところを伝えていけたらと思っています。

現在の日本は、保守化、右傾化が進んでいるといわれていますが、さまざまな状況の迫りがある中でも、どこまでも命の問題として捉えることができるかが問われていると思うんです。

集会通し平和問題と教会現場をつなげる
命の問題として「平和」考え

金光教東京平和集会企画委員　**山田 浩子**先生

2001（平成13）年から企画委員として企画立案に加わる。その他、東京センター平和協議会委員、現代社会問題研究会にも参加。神奈川県横浜西教会。

宮田　平和集会には、金光教東京学生寮の寮生や金光教学生会のメンバーといった若い人たちに、企画委員やスタッフとして継続的に加わってもらっていますが、それはやはり、関わることを通して学びを深めてもらいたいという願いがあってのことです。

山田　私自身、20代から集会に参加したり、結婚後もスタッフとして関わることでお育て頂きました。

結婚前、大阪から東京に遊びに来た時、集会にたまたま参加したんですが、その時、岸井勇雄先生（関西福祉大学元学長）が空襲で亡くなったお母さまのことを講演で話してくださいました。その内容に衝撃を受けたことが、命についていろいろと考える一つのきっかけになりました。

結婚後、集会の企画にも参加するようになり、いろいろと勉強をする機会が増えました。大変だったんですが、その中で気付いたのは、政治状況や社会が平和じゃないと、私たちの信仰というものも成り立っていかないのではないか、ということでした。

教会に持ち込まれるいろいろな難儀の背景をたどっていくと、社会の在り方、政治の在り方が問題になっていることが多いことに気が付くんです。平和問題が教会現場のご用ともつながっている身近なこととして感じるためにも、平和集会の意義があるのかなと思いますね。

辻井　企画に参加している寮生と話をしていると、「平和って何ですか？」「世界真の平和って何ですか？」と聞かれることがあります。そういう問い掛けを通して、いろいろと考えさせられますし、その結果、こちらの信心が問われ、信心が鍛えられる機会になるんですよね。

今後の課題

戦争体験を次世代へ

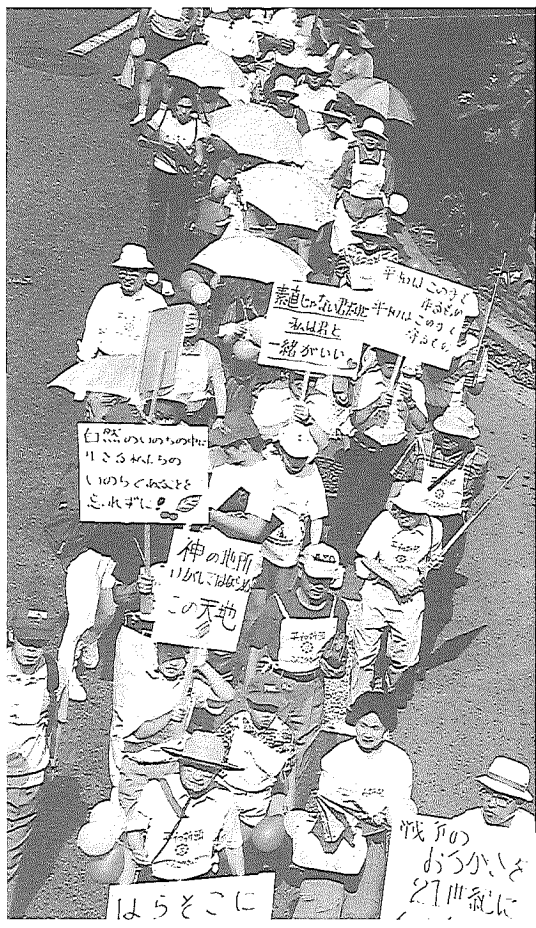
――平和問題への取り組みは教祖様のご信心とも密接につながり合っているわけですね

辻井　教祖様は神様から「人代（にんよ）」「神代（かみよ）」についてお知らせを頂いています。「わが力で何事もやり」とあるように、人間は自分の力で何でもコントロールできると勘違いしてしまうところがあります。それが「人代」を生み出しているわけです。

自分の命は自分一人のためでない、難儀な人のためにもあるんだという生き方に目覚めていく。足りないところを責め合うのではなく、足りないところを足し合って、補い合っていくような関係性をあらゆる場で生み出していく在り方が重要だと思うんです。平和とは何か、という問いに向き合いながら、さまざまな活動や実践に取り組む中で、「神代」を生み出すきっかけになればと思います。

山田　ある先師は、「祈っていたら平和になると思ったら大間違いだ」と、おっしゃいました。祈ってだけいれば平和になるということはなく、祈っている中で生まれてきたものを大事にして、次の段階として、何らかの行動を生み出していくことが大事なんだと思います。

広島平和集会での平和への祈りの中から、金光教平和活動センターが生まれ、沖縄県那覇教会の林雅信先生の祈りから始まったのが、沖縄遺骨収集です。平和を生み出そうと願う時、何かアクションを起こさなければ、絶対に本当の意味での平和は生まれてこないと思うんです。



▶第13回集会（1995（平成7）年）で行われた平和行進

平和を願う「今月今日、今、ここ」
生活の中で「神代」生み出す

金光教東京学生寮寮監　**辻井 篤生**先生

東京センター嘱託として、昨年まで平和集会の企画に担当として関わり、戦争問題や憲法問題などの多くの企画を手掛ける。和歌山県勝浦教会。

宮田　同じようなことになりますが、教団の基本方針で、「世界の平和と人類の助かり」と掲げていますが、その内容をどのような形で実現していくかが、私たち一人一人が問われているんだと思います。

ただ唱えていればそういう世界になるのかというと、それだけでは済みません。実際にそれぞれの所で行動し考えていかないと、そういう世界には行き着かないのではないでしょうか。

辻井　真の平和は、遠くにある理想や目的ではありません。人間生活の前提であり、手段なんです。ですから、常に時々刻々と生み出そうとする思いが必要です。「世界平和なんてとても」という東京寮の寮生には、あえて世界の平和より、家庭の平和の方が難しいと言います。だからこそ平和を願う「今月今日、今、ここ」の言動が大切だと。

一人一人の人間の尊厳を守るのが人権で、全ての一人一人の関係性そのものが平和なんです。その関係が良いか悪いかで、平和か平和でないかが変わるんです。

――今後の課題は何でしょうか

辻井　戦争の悲惨さと平和の大切さを「語り継ぐ」ことが、これからの平和集会の大きな役割だと思っています。

今までは、戦争体験者の語りを私たち戦争を知らない世代が聞いてきました。今度は話を聞いた私たちが、次の知らない世代に、風化しないように語り継いでいかなければなりません。戦争を知らない私たちも戦争を語ることができると思います。そのためにも、個々の戦争体験を普遍的な体験にしていかないといけません。そのようなものを語り継ぐ主体を育てていくのが、ここからの平和集会の責務なのかなと思います。

宮田　以前、ノンフィクション作家の保阪正康さんにご講演をお願いしたことがあるんですが、その中で、歴史を語って次世代につなげていく責任を負っているんだとおっしゃっていました。私たちはまだ、かろうじて戦争経験者から直接話を聞くことができる世代です。次世代にしっかり伝えていかないといけない責任を負っています。そのためにも平和集会を継続して続けていくということが、大きな課題であり、責任なんだと思います。

山田　毎年テーマを設けてみんなで平和について考えるような場は、教内では東京平和集会の他には多くありません。もしもなくなったら、平和について考えていく場が金光教の中では無くなっていくのではと危惧しています。平和集会があるおかげで、辛うじて意識がつながっていると思うんです。そのためにも集会を続けていくということが本当に大事だと思います。